

■ フォト・エッセイ ■

# 壁の中の平和な町

## エチオピア・ハラル

写真・文  
桜木奈央子  
Naoko Sakuragi



ほくは愛した、砂漠を、日に焼けて乾燥した果樹園を、色の褪せた店を、生ぬるくなった飲み物を。

『ランボー詩集』(清岡卓行訳)

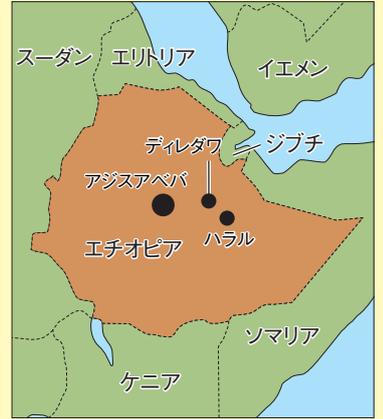
エチオピアの首都、アジスアベバはアムハラ語で「新しい花」という意味である。アジスアベバに到着した肌寒い夜にビールを飲みに行くと、その店では日本の演歌が流れていた。「ジャパニーズクラシック」とよばれ、エチオピアの人びとに親しまれているという。

「アフリカ」という言葉の響きを静かに裏切ってくれる、エチオピアはそんな国だ。控えめな人びと、アムハラ文字の不思議な形、そして独自のエチオピア歴。二〇〇七年九月、エチオピアはミレニアムを迎えた。

ハラルは、新市街と旧市街にわかれている。ホテルや役所があるのが新市街。旧市街は「壁に囲まれた町」として有名で、かのフランスの詩人ランボーもこの町に住みついていたという。

詩人が魅了された、壁の中の町。私は、ロマンティックなその響きが気に入って、短いエチオピア滞在をハラルで過ごすことに決めていた。

ハラルは砂漠とサバンナに囲まれた深い渓谷の中の台地上にあり、旧市街は「ハラール・ジャゴル要塞歴史都市」として二〇〇六年にユネスコの世界遺産に登録された。



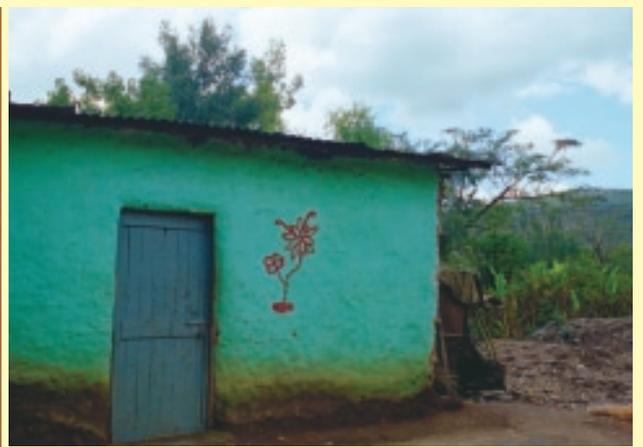
約四メートルの城壁に囲まれた町の中に、八二のモスクと一〇二の霊廟が建っている。壁の中の旧市街に足を踏み入れると、道が迷路のように入り組んでいて同じ道を何度も歩いてしまう。町の女性が笑いながら声をかけてくれる。「あなた何度もこの道を歩いているわ。ガイドがいた方がいいんじゃない。壁の外に出られなくなるわよ」。

観光ガイドをしているハイルーは二〇歳。ハラール旧市街で生まれた。「この町のことならなんでも知っている」という彼はまるで歩くハラール辞典だ。ハラールの歴史から地元の人しか知らないような細い路地の名前まで、なんでも教えてくれた。

タイヤストリート。古タイヤがここに集められ、それを再利用して作ったサンダルなどが山積みになっている道。

ギルギリストリート。仕立て屋が細い道沿いにミシンを出して商売をしている通り。布地屋もいくつかある。ギルギリとはミシンの音。ギルギリギルギリ……。

ピースストリート。人ひとり通るのがやっとの細い道。ここで誰かとすれ違ふと、例えばそれがけんか中の相手だとしても道を譲り合わないと通れない、平和が生まれる路地。むかし壁の外から敵が侵入し、ここで両軍がはちあわせた。しかしあまりの道の狭さに武器を捨てるしかなく両軍はここで握手を交わしたという。

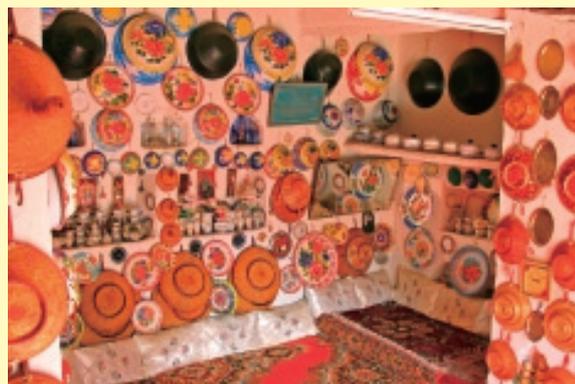


旧市街にあるランボアの住居跡「アルチ  
 ニール・ランボー・ハウス」には彼に関する  
 資料が展示されている。著作物はもちろ  
 んのこと、手紙のコピーや旅行カバンなど  
 がガラスケースの中に並んでいた。何かの  
 本で読んだランボアの手紙の一節を思い出  
 す。「いつも同じ場所にいるなんて、私に  
 はとても不幸な運命であると思われま  
 す。私は世界のすべてを歩き回りたいもので  
 す。世界なんてそれほど広くはないのです」。  
 かつて詩人であったランボアの目に、ア  
 フリカとイスラムの文化が融合したハラ  
 ルの町は、エキゾチックなものに映ったに  
 ちがいない。

資料室からさらに階段を登るとテラスが  
 ある。そこからハラルの町を眺めていると、  
 庭で少女が木の容器と棒を使ってコーヒー  
 豆を挽いているのが見えた。

祖国フランスから遠く離れた異国の地に  
 足を踏み入れたランボオもまた、ハラルコ  
 ーヒーの洗礼を受けただろう。土でできた  
 小さな家のひんやりした室内で、澄んだ瞳  
 のアビニシア美女のコーヒーセレモニーを  
 見つめながら濃いコーヒーを飲み、ようや  
 く柔らかな視線を取り戻して世界を眺めた  
 にちがいない。

旧市街にあるガイドのハイルーの親戚の  
 家に泊まることになった。屋内には色鮮や  
 かな工芸品がぎっしりと並んでいた。藤で  
 編んだかごや、食事のときに使う食器であ



る。「結婚式するときには、この壁に並んでいる食器すべてを使ってごちそうをふるまうのよ」とこの家のママが教えてくれた。「ハラルでは壁の食器の並べ方で、その家に年頃の娘が何人いるかがひとめでわかるようになってきているの。訪問者が次に来るときは、花婿を連れてこられるように」。

ハラルですごく最後の日は雨だった。ハラルにはビール工場があり直送の生ビールが飲める。旧市街の門がプリントされたグラスで新鮮なビールを飲みながら、雨の町がゆっくと夜に変わっていくのを眺めた。ロバをひいた少年や、カラフルな民族衣装の女性たちが水たまりを避けながら帰路を急ぐ。雨宿りにビールを飲んで帰る人びとも少なくない。雨音と低く流れるエチオピア音楽をBGMに、アムハラ語が飛び交う。ほろ酔いで旧市街の宿に戻り、ママにおやすみを言ってベッドにもぐり込む。遠くの方で雷が、階下からはママの笑い声がきこえる。シートからは石けんの匂い。ろうそくの灯が消えると同時に、私は深い眠りに落ちた。壁に囲まれたこの町にはむかしから変わらない、人びとの平和な暮らしがある。

(とく／らぎ) なおこ／フォトグラファー